

経営のヒント98 離見の見

観の目つよく、見の目よはく

目配り 兵法では「目付」という。宮本武蔵は「五輪書」で次のように述べている。

「観見二つの事、観の目つよく、見の目よはく、遠き所を近く見、ちかき所を遠く見ること兵法の専也」

つまりは、目配りには、「観」と「見」の二種類があり

「観」ものごとの本質を深く見極めるのを第一として、

「見」表面上のあれこれの動きを見るのは二の次にせよ、

との意味になる。

世阿弥はその花伝書の中で「離見の見」と呼んだ。

観客によって見られる演者の舞は「離見」すなわち、演者自身の目を離れた他者の直感（離見）である。

一方、演者の眼で見た己の姿は「我見」つまり演者の主観的直感であって、「離見の見」=他人の眼差しをわがものとして見るものではない。

もし、他人の眼差しをわがものとして見ることができれば、そこに見えてくるものは、演者と観客が同じ心を共有して見た表象 = 「見所同心の見」ということになる。

それができたとき初めて、演者は自身の姿を見極めることができるわけだ。

したがって、われわれは他人の眼差しをわがものとし、観客の眼に映った自分を同じ目で眺め、肉眼の及ばぬ身体の間々まで見届けて、身体全体の調和した優雅な舞い姿を、完成しなければならない。

つまりは、心の目を背後に置いて、返すがえすも「離見の見」をよくよく理解して体得し、己の眼は、眼自体の見られない道理を知って、前後左右を隈なく掌握すべきである。

では、こうした「離見の見」を日常生活に応用するには、具体的にどうすればよいのだろうか。

まずは何よ、先常に醒めた心で、自分のすべてを見ることだ、と世阿弥は言う

「目を前に見て、心を後ろに置け」(花鏡)

というのは、このためである。

冷静に客観的に己を計れば、他人の目を反射して、己の真の姿が窺えるという

そのうえで世阿弥は「初心不可忘」(風姿花伝)を繰り返した。

「初心を忘るれば初心へかへる理を、よくよく工夫すべし」

この心構えを繰り返し実践すれば「離見の見」は養われるという

観方も培い、磨くことができるようになるという

出来るかどうか、それは、

「せぬならでは手立てあるまじ」(風姿花伝)

やってみなければしょうがない、と世阿弥も言っている。

<経営のヒント>

「離見の見」、つまりは大局から自己を見ることの大切さ

部分から全体を見るのではなく、大局(全体像)から小局(部分)を見ることの重要さ

経営の要点では、「大局観察、部分着眼」という

そのためには、「目を前に見て、心を後ろの高い所に置く」気持ちでいることが重要だと感じます。

そして世阿弥が言っているように、まずはやってみることでですね。